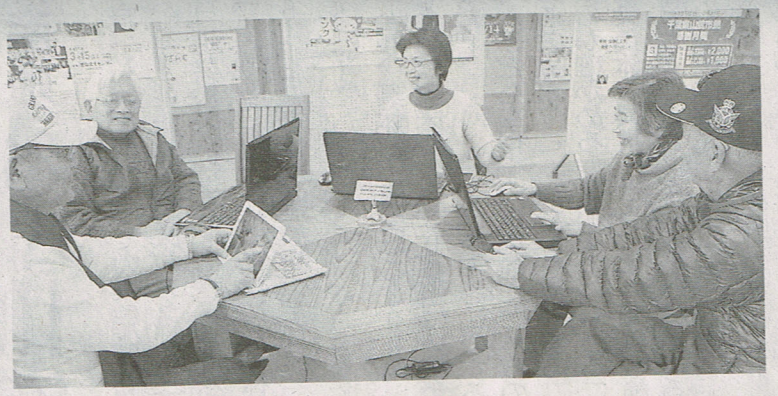
ネット上の「井戸端会議」話題や写真投稿

協議会が運営 新たな知り合いづくりも

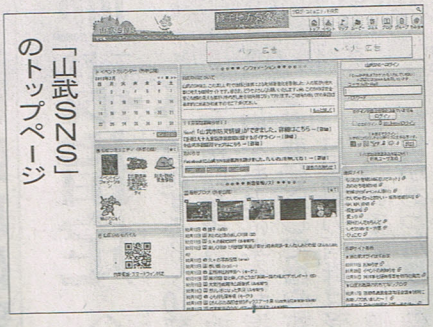
インターネット上で身の回りの出来事などを語り合う「山武SNS」がにぎわっている。「ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）」と呼ばれる、いわばネット上の井戸端会議だ。山武市の協議会が運営し、発信しているのは主にシニア世代。ここから実際に顔を合わせる交流の場も生まれた。



インターネットを通して交流するシニア世代の会員たち＝山武市

オットセイが蓮沼海岸砂浜で悠然と休憩――。

山武SNS（http://samu-sns.jp/）に昨年11月2日、そんな情報が動画とともに投稿された。それを見た会員から「貴重な映像」「どうしたのかしら」とコメント（意見）が相次いだ。



「山武SNS」のトップページ

現れたのは傷を負って衰弱したトドで、住民や報道陣が大勢詰めかける騒動に。数日後に保護されるまでの一部始終を投稿したのが74歳の男性だ。テレビ局から動画の使用依頼も舞い込んだ。

「まさに地域SNSの底力。コメントがあるとうれしくて、どんどん投稿しています」と川込八千代さん(60)。「モーグリ」のハンドルネーム（SNSでの名前）で、ほぼ毎日、書き込みを続ける。

SNSは身近な出来事や写真などを投稿して公開、利用者同士が情報交換できるネット上のサービス。人の投稿にコメントを返すこともできる。市や地元NPOでつくる山武地域SNS協議会が2010年7月、市民が自由に語り合える場を提供しようと開設した。

誰でも閲覧できるが、招待されるメールを受け取って登録しないと、投稿はできない仕組みだ。市によると、会員は311人（昨年4月時点）で、中高年が多いのが特徴だという。

「台風が直撃。風雨が強まってきました」「小さな春見つけた！」。季節の話題、地域の催し、お薦めの店など、様々な話題が連日投稿される。そんなやりとりから、新たなつながりも生まれた。

毎週水曜日に「さんぶの森交流センターあららぎ館」（同市埴谷）のロビーで、実際に顔を合わせるサロンを開催。情報交換したり、パソコンの操作を教え合ったりしている。毎回5、6人が集まり、互いをハンドルネームで呼び合う。

「だんじり」こと、菅居康子さん(70)は大阪出身で約20年前に引っ越してきた。山武のことはあまり知らなかったが、協議会のパソコン講座に参加したことがきっかけで招待メールが届き、投稿を始めた。「知り合いができて、違った人生になったわ」と笑う。

山武SNS内には「震災・災害復興支援コミュニティ」もある。東日本大震災の発生後に立ち上げ、市内の被災状況などを発信した。ほかの地域SNSともつなげて、災害時の情報交換にも役立てている。

市市民自治支援課は「市民が主体的に運営し、市の情報をどんどん発信してほしい」と期待する。ただ会員数は市の人口の1%に満たず、投稿者も固定されがち。若い世代に広げることが今後の課題だ。

松戸などでも

「地域SNS研究会」（東京都）によると、地域SNSは全国で263（昨年2月時点）。県内には「房州わんだぁらんど」や「松戸ラブマツ」などがある。交流が盛んな例がある一方、更新が滞って休業状態のものも少なくない。

川込さんは「ルールを設けず気楽に投稿し、地域の発信力を高めていきたい」と話している。

（石平道典）